

「... 事実也。」から「。事実...」へ — 談話機能の発達に伴う統語位置の変化 —

柴崎礼士郎 (明治大学) †

From Predicate Use to Adverbial Use: Syntactic Changes in Tandem with Discourse-Functional Development

Reijiro Shibasaki (Meiji University)

要旨

本稿は文頭・節頭（以下文頭と略記）に使用される「事実（事實）, ...」に注目し、特に明治期以降の史的発達を考察する。北原・他（2006）によれば、文末・節末（以下文末と略記）に使用される「事実也」（名詞＋繫辞）のような述部用法は平安期から確認可能であるが、文頭に使用される副詞用法は20世紀初頭からと記述されている。そこで本稿では、『国民の友コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』および『太陽コーパス』を使用し、明治大正期における「事実」の文頭副詞機能の発達経緯を詳細に分析する。更に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（特に書籍ジャンル）を用いて1970年代から2000年代初頭における直近の変化を捉える。調査結果から「文末用法>文中用法>文頭用法」という史的発達が確認できるものの、現代日本語においては文頭用法（「事実」）と文末用法（「事実である、事実です」）に特化した分布が見て取れる。

1. はじめに

2010年代に入り、名詞構文が新たな注目を集めている印象を受ける。例えば、角田(2012)の提示する「人魚構文」（角田(1996)で提示された「体言締め文」の新展開）は、その命名からだけでも目を引くものであるし、鳴海(2015)による漢語名詞の副詞化に関する研究も既存の国語学の枠を超える質感を伴う。他方、ニュース報道で使用されている名詞構文に正面から取り組む田中(2012)などもある。

対照言語学的色合いの濃い新屋(2014: 第1章)によれば、これまで翻訳研究を中心に指摘されてきた「英語＝名詞中心、日本語＝述語中心」という見解は、どうも再考の余地があるとのことである。例えば以下の例文の下線部に注目したい。

- (1) 何かあった模様だ。
- (2) どうやら無事におさまった気配だ。（新屋 2014: 8）

「わけ、ところ、つもり、もの、こと」などの形式名詞と異なり、実質的な意味を有する名詞が文末詞的な働きをすることに新屋(2014)は注目し、こうした表現を含むものを「文末名詞文」と呼んでいる。日本語の形態統語構造に注目した形式名詞の文法化なども注目すべき現象であるが（e.g. Shibasaki 2011）、実質名詞の多機能性に注目することにより、日本語の名詞句・名詞構文を対照言語学的あるいは通言語学的に再解釈する意義が見いだせると思われる。本稿では、実質の意味を保持する「事実」に注目し考察を進める。

北原・他(2006)に従い極簡単な史の変遷を以下に示す。(3)に示すように、「事実」は名詞

† reijiro (at) meiji.ac.jp *(at)の部分>@に変えて御使用ください。

として述部の一部に組み込まれて用いられていたが、現代の日本語では(4)のように副詞的機能を果たす場合も多い。(3)は名詞として、(4)は副詞としての初出例である。

- (3) 撰政被来云、今夜斎院盗人入云々、仍奉遣奉云々、右大弁来云、斎院事実也。
(寛仁元年(1017)七月二日『御堂関白記』; 北原・他 2006)
- (4) 兄さんは誰よりも今の若い人達の心をよく知ってゐる。そして事実、東京で若い多くの女のお友達もおありの事であつたらうし。
(1914『田舎医師の子』<相馬泰三>五; 北原・他 2006)

(3)では「事実なり」のように述部の一部として使用されているが「事実」は実質的意味を保持しており、(4)では接続詞を伴った形で文副詞的機能を果たしている。また、副詞機能が20世紀初頭頃に生じ始めた可能性も(4)から分かる。これら以外にも指示詞や節を伴う用法もあるが、「事実」は提題助詞なども伴わない独立用法を特に発達させている。そこで本稿では、「事実」の使用を文レベルで捉え、述語の一部としての「文末用法」から副詞としての「文頭用法」への拡張過程をコーパスを用いて考察する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では研究の背景を簡潔に提示し、第3節ではコーパスを用いた調査結果を提示する。第4節では調査結果の意義を例示する。第5節はまとめである。使用するコーパスは表1の通りである。尚、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』については、近年の史的変遷を見るため、および、他のコーパスとの整合性(ジャンル)を揃えるために、今回の調査では「書籍」ジャンルに限定してある。

表1 使用コーパス¹

コーパス	語彙数	時期	備考
『明六雑誌コーパス』	約18万語	1874-1875年(明治7-8年)	
『国民之友コーパス』	約101万語	1887-1888年(明治20-21年)	
『近代女性雑誌コーパス』	約210万字	1894-1895年(明治27-28年) 1909年(明治42年) 1925年(大正14年)	『女学雑誌』(1894-1895年) 『女学世界』(1909年) 『婦人倶楽部』(1925年)
『太陽コーパス』	約1450万字 ²	1895年(明治28年) 1901年(明治34年) 1909年(明治42年) 1917年(大正6年) 1925年(大正14年)	
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)	約6,270万語	1971-2005 (昭和46年-平成17年)	「書籍」ジャンルのみ使用

2. 研究の背景

前節で紹介した名詞研究に加え、高橋・東泉(2013, 2014)や東泉・高橋(2013)の取り組みは注目に値する。以下の例文で確認してみる。

¹ 国立国語研究所のホームページを参考に作成してある。

² 『太陽コーパス』の収録語彙数については近藤(2013)にヒントがある。同論文を紹介して下さった東泉裕子先生へ御礼申し述べます。

- (5) 人民の情と合和して、かかる結果となりしなり。
 (1872『自由之理』＜中村正直訳＞; 北原・他 2006; 高橋・東泉 2014: 104)
- (6) 親戚朋友度々相往來し、相共に飲食談笑せし結果、流れ〜〜て、果ては、多くの虚禮が、うるさき迄に出來しならんか。(1895 HM 生「歳暮」; 『太陽コーパス』)
- (7) 女にはなぜ作曲家がいない? 「そこで、女のものの考え方について非作曲家的なところを考えてみた。結果、女の考え方というのは、1+1 は 2 であるということだ」
 (1974-75 藤本義一『男の遠吠え』; 北原・他 2006; 高橋・東泉 2014: 107)

北原・他(2006)によれば、実質名詞としての「結果」は(5)のように述部の一部として使用されはじめ、徐々に(6)に示す連体修飾を受けて接続詞的に用いられる用法が発達している。その後 20 世紀の後半に入り、(7)のような「前文を受けて副詞的に用いる」談話機能に至っている。

ここまでの調査報告であれば、既存の国語学と言語学の成果に基づく亜流とみなされる可能性もある。しかし、高橋・東泉(2013, 2014)と東泉・高橋(2013)から読み取ることができる下記の点は、今後の言語変化を俯瞰的に捉えられる可能性を含んでいる。つまり、実質的内容を持つ名詞として生起した「結果」が、述部の一部として用法を発達させ、節接続機能を創発し、最終的には文頭の副詞機能に至っている点である。換言すると、文レベルの構文として考えた場合、述部という「文末用法」としての機能から(上述の新屋 2014 に詳しい)、節接続用法という「文中用法」、そして、前文を受けて後述の情報を導入する「文頭用法」という機能拡張は、談話機能の発達に伴う統語変化として「文末>文中>文頭」のようにまとめられる。大局的に見れば、形式言語学のアプローチによる Roberts and Roussou (2003)の研究成果と一致している。一方、機能言語学の視点から英語の *then* に注目し、歴史的に「文頭>文中>文尾」という談話機能と統語位置の拡張が確認できるとする Haselow (2012)の研究成果とは逆方向の変化となる。こうした文(あるいは発話)の周辺から周辺へという変化は近年注目を集めていることから(e.g. Beeching and Detges 2014)、高橋・東泉の研究は示唆に富んでいる(Higashiizumi 2015 も参照)。³

もう一点付け加えるとすれば、高橋・東泉の一連の研究成果は、北原・他(2006)で例示されている「初出」例よりも早い事例を紹介できている点である。これは、高橋・東泉の入念な調査もさることながら、「コーパス」というツールの効用と見るべきであろう。

本稿では、高橋・東泉(2013, 2014)および東泉・高橋(2013)の研究成果が、果たして「事実」という異なる実質名詞の機能拡張に応用可能かどうか確認したい。⁴

3. 考察手順と結果

紙幅制限上、分析手順を(8)に示す論点に絞り込む。

³ 「周辺部」という考察点は Onodera (2011)、小野寺(2014)に詳しい。左右の周辺部に生起する表現が融合する現象に取り組む柴崎(2015a)、Shibasaki (forthcoming)も関連現象である。

⁴ ただし、本稿の内容は、Shibasaki (2014a,b)および柴崎(2015b)で提示した英語を中心とした西欧語における「周辺部」の研究に根差しており、高橋・東泉による一連の研究とは異なる出発点から始まっている点を明記しておく。

- (8) a. 文頭用法 (副詞用法): ...。事実／事実上／事実は (,) ...
 b. 文中用法 (節接続用法): ...事実なるが／であるが／ですが (,) ...
 c. 文末用法 (述語用法): ...事実なり／である／です。

勿論、(4)のような異形態も多数存在するが (e.g. そして事実、事実上、事実なるが如し、事実なりとす、etc.)、網羅的に一覧を作成して各々を論じる紙幅の余裕はない。予備的研究として柴崎(2015c)で示した通り、文頭用法の「事実」は比較的安定した頻度を示しており、文中用法と文末用法とで比較対象し易い点もある。本稿の新しい点は、柴崎(2015c)で調査した文頭用法と文末用法の更なる精査に加え、文中用法という節接続用法の調査結果を加えることにより、談話機能の発達と統語変化を俯瞰することである。

表2 文頭用法「事実(事実)／事実(事実)は／事実上(事実上)」(『太陽コーパス』)

	1895	1901	1909	1917	1925	合計
事実 (,)	0	2	1	5	10 (1)	18
事実上 (,)	0	0	1	2	2	5
事実は (,)	0	0	0	0	2	2
合計	0	2	2	7	14	25

表3 文中用法「事実(事実)なるが／であるが／ですが」(『太陽コーパス』)

	1895	1901	1909	1917	1925	合計
事実なるが (,)	1	2	1*	3	0	7
事実であるが (,)	0	2	4	6	14	26
事実ですが (,)	0	0	0	0	2	2
合計	1	4	5	9	16	35

* 「～事実なるが故に」

表4 文末用法「事実(事実)なり／である／です」(『太陽コーパス』)

		1895	1901	1909	1917	1925	合計
事実なり	① 事実なり、(読点) ⁵	24	18	3	3	0	48
	② 事実なり。(句点)	10	25	24	12	1	72
	小計	34	43	27	15	1	120
事実である	① 事実である、(読点)	0	8	5	2	1	16
	② 事実である。(句点)	0	0	30	71	72	173
	小計	0	8	35	73	73	189
事実です	① 事実です、(読点)	0	0	0	0	1	1
	② 事実です。(句点)	0	0	1	4	5	10
	小計	0	0	1	4	6	11

⁵ 渡辺・村石・加部(1993)によれば、今日のような句読法が普及し始めたのは明治20年代から30年代頃とある。例えば、坪内逍遙の『小説神髓』(明治18年刊行)には句点および読点も使用されていなかったという(渡部1995: 3-4に詳しい)。表4には、句点の意味で読点を用いていると読めるものを提示した。

表 2~4 に各用法の発達経緯を提示する。数値は素頻度を表している。尚、括弧内の数値は曖昧事例数を意味し、全体の素頻度にも含めてある。注意すべき点は、表 1 に示した近代語コーパスのうち、『太陽コーパス』を除く 3 コーパスは(8)に提示した事例を殆ど確認できないことである。そこで、表 2~4 には『太陽コーパス』からの検索結果を提示し、その他のコーパスからの検索結果は必要に応じて記すこととする。文頭用法(副詞用法)が 20 世紀初頭頃から使用され始めたことは第 1 節で確認した(北原・他 2006)。その上で、(8)の用法がいつ頃から使用され始めたのかを更に精査し、談話機能の発達経緯を統語位置から再考することが本考察のポイントである。収録語彙数の異なるコーパスを用いて素頻度を標準化頻度に均して計量化することは、本考察の域を超えるものであることを記しておく。

4. 分析

4.1 『太陽コーパス』の場合

表 2~4 から以下の点を読み取ることができる。一点目は、1895 年(明治 28 年)時点では文頭用法(副詞用法)が確認できず、20 世紀に入って徐々に散見し始める点である。二点目は、「文末用法>文中用法>文頭用法」という機能拡張過程が読み取れる点である。つまり、1895 年(明治 28 年)時点で見ると、文末に生起する述部用法の使用例が相対的に高く、節接続機能としての文中用法は低頻度で確認できる程度である。⁶ 三点目は、繫辞の変化が見取れることである。明治大正期における大きな変化として、「なり型」から「である型」への過渡期を数値から読み取ることが可能である。更に、「です型」の文末用法が 1909 年(明治 42 年)から確認可能であるが、頻度面から黎明期と判断できそうである。「です型」の文中用法が 1925 年(大正 14 年)から確認できる点は、「文末用法>文中用法」という流れを確認できることも見逃せない。

4.2 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(書籍ジャンル)の場合

『太陽コーパス』に基づく調査結果と分析が妥当であるかを、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の書籍ジャンルを検索することで確認してみたい。第 3 節と同じ手順による考察結果は表 5 にまとめてある。現代日本語の書籍ジャンルに限定してはあるが、文頭用法の「事実」と文末用法の「事実である、事実です」に特化した発達が確認できる。一方で、文中用法は全体的に伸び悩んでいる感も見取れる。こうした分布上の違いは何を意味しているのだろうか。

一つの解釈として、繫辞と共に生起する述語用法(文末用法)の場合は、各時代で好まれる繫辞の違いはあれども、「事実+繫辞」としての構文が時代を超えて固定化する方向に進んでいることを示唆していると判断できる。一方、20 世紀初頭頃より使用例が確認で

⁶ 『明六雑誌コーパス』では、1875 年(明治 8 年)の段階で「...事実なり | 即(ち) ...」という文末用法が 3 例確認できるが、「事実なるが」という文中用法は皆無である。尚、「|」はコーパス作成段階で、作成者が「文の切れ目」と判断したことを示す記号である(ワークショップ当日の個人談話: 田中牧郎先生、近藤明日子先生)。『国民之友コーパス』でも文末用法と判断できる読点付き「...事実なり、」が 12 例確認できる(1888 年[明治 21 年])が、「事実なるが」という文中用法は皆無である。『近代女性雑誌コーパス』でも、文末用法と判断できる事例が 5 件確認できる一方(1894 年[明治 27 年])に 2 件、1895 年[明治 28 年]に 3 件)、文中用法は 1 件のみである(1895 年[明治 28 年])。大局的に見て、文末用法が徐々に接続機能を発達させたことで文中用法が創発されたことが窺いしれる。

きる副詞用法（文頭用法）は後続する主情報を導入する談話機能を担っている。つまり、文頭は対話機能を担う表現が創発されやすい統語位置と考えられうる。⁷

表 5 文頭／文中／文末用法の分布と変遷（『BCCWJ』の書籍ジャンル）

		1970-74	1975-79	1980-84	1985-89	1990-94	1995-99	2000-05	合計
文頭用法	事実（、）	0	7	3	50	101	101	351	613
	事実上（、）	0	0	0	0	8	2	22	32
	事実は（、）	0	0	0	2	2	1	7	12
文中用法	事実なるが（、）	0	0	0	0	0	0	0	0
	事実であるが（、）	0	0	0	1	4	2	19	26
	事実ですが（、）	0	0	0	2	2	3	11	18
文末用法	事実なり。	0	1	0	0	0	0	0	1
	事実である。	0	7	8	58	87	96	309	565
	事実です。	0	0	4	9	26	43	158	240

4.3 機能拡張の方向と分布

第 4.1 節で指摘したように、機能拡張の方向は「文末用法>文中用法>文頭用法」で間違いなさそうである。この点は、高橋・東泉(2013, 2014)および東泉・高橋(2013)の研究成果を支持できる考察結果と言える。一方で、20 世紀初頭から始まる機能拡張は、各用法に均等に進行しているとは言えない。つまり、「文頭用法」と「文末用法」に特化した分布が表 5 から明らかである。節接続機能である「文中用法」は、「文末用法」から「文頭用法」へという機能拡張の橋渡しとして創発したが、20 世紀後半での使用頻度からは伸びが確認できない。この点は、高橋・東泉の一連の研究からは明確な見解が得られないことから、今後の課題として取り組む価値のある事象である。

本節を締め括るにあたり、他言語における関連研究を一つだけ紹介しておく。節と節を接合する機能を担う接続副詞（linking adverbials; *then, however, though, etc.*）の最新の研究報告として Lenker (2015)がある。Lenker (2015)は接続副詞の発達を古英語から後期近代英語まで俯瞰している。仮に本稿と同じ「文頭・文中・文末」という基準で Lenker (2015)の報告を見た場合、先行情報を後行情報へ繋げる節接続機能を果たす文中用法の発達が、初期近代英語期（Lenker のデータでは 1570 年代）以降着実に増加している事実が明らかとなる。構造的に異なる英語と日本語を俄かに比較することはできない。しかし、英語では文中用法が近年発達しているのに対して、日本語では文頭用法と文末用法の発達が著しい点は注意すべきであろう。言語構造と文体的ヴァリエーションには相関性があると考えられるからである。

5. まとめ

本稿では、近代語コーパスと『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（書籍ジャンル）を用いて、「事実」の「文頭用法・文中用法・文末用法」を考察した。19 世紀末あるいは 20 世

⁷ 相互行為言語学（interactional linguistics）では、こうした機能を担う表現群を「投射構文」（projector constructions）と呼び慣わしている。関連研究として Shibasaki (2014a,b)、柴崎(2015b)および柴崎(近刊)などがある。

紀初頭頃より拡張の兆しが見え始め、「文頭用法>文中用法>文末用法」という方向で変化拡張が確認できた。一方で、20世紀後半における分布状況は「文頭用法」と「文末用法」に特化してきており、節接続機能を果たす文中用法は相対的に衰退しつつあるようにも見えた。今後の展望としては、高橋・東泉(2013, 2014)および東泉・高橋(2013)などで報告されている漢語副詞なども含めた包括的な言語変化研究に取り組む点、および、Shibasaki (forthcoming)などで報告される他言語における関連事例の研究を進める点が挙げられる。

謝 辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「英語史に見る主要部と依存部の競合関係について」(研究代表: 柴崎礼士郎; 課題番号: 25370569)による補助を一部得ています。また、本科研費プロジェクトは、英語史における同現象の詳細な研究成果を対照言語学的あるいは通言語学的研究へ応用させることにも主眼の置かれている点を付記しておく。尚、本稿の一部は『文法化: 日本語研究と類型論的研究』(国立国語研究所 国際シンポジウム、2015年7月3-5日)での発表とも関連している。発表当日、貴重な助言を下された先生方へこの場を借りて感謝申し上げます(敬称略・五十音順: 大野剛、大堀壽夫、古賀裕章、鈴木亮子、高橋圭子、Bernd Heine、東泉裕子、堀江薫)。

文 献

- 小野寺典子(2014)「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」、金水敏・高田博之・椎名美智(編)『歴史語用論の世界』、3-27、ひつじ書房。
- 北原保雄、他(編)(2006)『日本国語大辞典』第二版、小学館。
- 近藤明日子(2013)『近代女性雑誌コーパス』小説会話部分に現れる一・二人称代名詞の計量的分析『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.135-144、国立国語研究所。
- 柴崎礼士郎(2015a)「共有構文 (*ἀπό κοινού*) の創発と談話構造—現代アメリカ英語を中心に—」『ことばと人間』第10号、pp.17-37。「言語と人間」研究会。
- 柴崎礼士郎(2015b)「直近のアメリカ英語史における *the problem is (that)* の分析—構文の談話基盤性を中心に—」『語用論研究』第16号、pp.1-19。日本語用論学会。
- 柴崎礼士郎(2015c)「文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性について—「事実」と「問題」を中心に—」『文法化: 日本語研究と類型論的研究』国立国語研究所 国際シンポジウム、2015年7月3日-5日。
- 柴崎礼士郎(近刊)「現代アメリカ英語の二重コピュラ構文」秋元実治、青木博史、前田満(編)『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房。
- 新屋映子(2014)『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房。
- 田中伊式(2012)「ニュース報道における「名詞+です」表現について」『放送研究と課題』October 2012、pp.16-29。
- 角田太作(1996)「体言締め文」鈴木泰、角田太作(編)『日本語文法の諸問題: 高橋太郎先生古希記念論文集』、pp.39-161、ひつじ書房。
- 角田太作(2012)「人魚構文と名詞の文法化」『国語研プロジェクトレビュー NINJAL Project Review』No. 7、pp.3-11。
- 高橋圭子、東泉裕子(2013)「漢語名詞の副詞用法～『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパス』を用いて～」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.195-202、

国立国語研究所.

高橋圭子、東泉裕子(2014)「近代語コーパスにみる「結果」の用法」『第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.103-112、国立国語研究所.

鳴海伸一(2015)『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として』ひつじ書房.

東泉裕子、高橋圭子(2013)「「結果、こういうことが言えそうです。」～コーパスにみる名詞の文副詞的用法～」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、pp.91-96、国立国語研究所.

渡辺富美雄、村石昭三、加部佐助(1993)『日本語解釈活用事典』ぎょうせい.

渡部善隆(1995)「横書き句読点の謎」九州大学情報基盤研究開発センター.

(<http://yebisu.cc.kyushu-u.ac.jp/~watanabe/RESERCH/MANUSCRIPT/OTHERS/YOKO/ten.pdf>)

Beeching, Kate and Ulrich Detges. (eds.) (2014) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery*. Leiden: Brill.

Haselow, Alexander. (2012) “Discourse Organization and the Rise of Final *then* in the History of English.” In Irén Hegedüs and Alexandra Fodor (eds.), *English Historical Linguistics 2010: Selected Papers from the Sixteenth International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL 16), Pécs, 23-27 August 2010*, pp.153–176. Amsterdam: John Benjamins.

Higashiizumi, Yuko. (2015) “Periphery of Utterance and (Inter)subjectification in Modern Japanese: A Case Study of Competing Causal Conjunctions and Connective Particles.” In Andrew D. M. Smith, Graeme Trousdale and Richard WALTERIT (eds.), *New Directions in Grammaticalization Research*, pp.135-156. Amsterdam: John Benjamins.

Lenker, Ursula. (2015) “Knitting and Splitting Information: Medial Placement of Linking Adverbials in the History of English.” In Simone E. Pfenninger, Olga Timofeeva, Anne-Christine Gardner, Alpo Honkapohja, Marianne Hundt and Daniel Schreier (eds.), *Contact, Variation, and Change in the History of English*, pp.11-38. Amsterdam: John Benjamins.

Onodera, Noriko O. (2011) “The Grammaticalization of Discourse Markers.” In Heiko Narrog and Bernd Heine (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, pp.614-624. Oxford: Oxford University Press.

Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Shibasaki, Reijirou. (2011) “From Nominalizer to Stance Marker in the History of Okinawan.” In Marcel den Dikken and William McClure (eds.), *Japanese/Korean Linguistics 18*, pp.101-113. Stanford: CSLI Publications.

Shibasaki, Reijirou. (2014a) “On the Development of *the point is* and Related Issues in the History of American English.” *English Linguistics* 31 (1), pp.79–113.

Shibasaki, Reijirou. (2014b) “On the Grammaticalization of *the thing is* and Related Issues in the History of American English.” In Adams, M., Fulk, R. D. & Brinton, L. J. (eds.), *Studies in the History of the English Language: Evidence and Method in Histories of English*, pp.99–121. Berlin: De Gruyter Mouton.

Shibasaki, Reijirou. (forthcoming) “Sequentiality and the Emergence of New Constructions: *That's the bottom line is (that)* in American English.” In Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Frauke D'hoedt, Liesbet Heyvaert, Charlotte Maekelberghe and Peter Petré (eds.), *ICEHL-18 Volume (provisional title)*. Amsterdam: John Benjamins.